

「知識」と「心」を育む新聞活用～そして未来へ～

指定校 2 年次 長野県松川高等学校 若林 寿輝

1 本校の現状

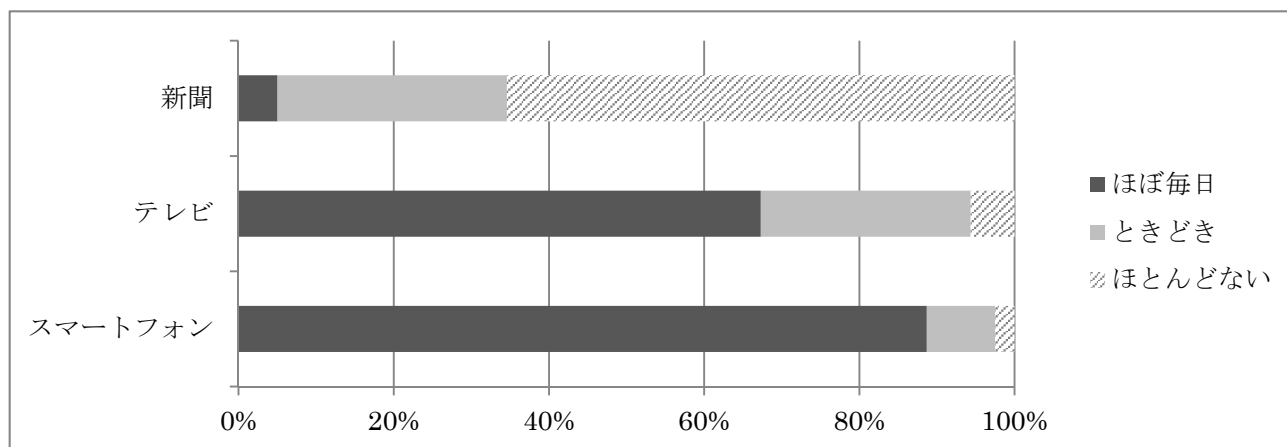
1) 松川高校について

はじめに N I E 研究指定校であった 2 年間、多くの財産を松川高校は得られたと感じています。信濃毎日新聞社を初めとする各関係機関、関係者の皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。この 2 年間、松川高校自身が新聞記事となって紙面を飾ることも幾度かありました。ボランティア部・生徒会による東北支援活動。文化祭での熱中症。満蒙開拓記念館における学習。陸上部のインターハイ出場。演劇部の全国大会出場。授業でのそば打ちやケーキ作りと挙げていけばきりがありません。新聞に記事が出る度に、取材された生徒達は気恥ずかしそうにするも、その顔は嬉しさを隠しきれていませんでした。

2 年前、何も分からず手探りの状態で始めた N I E 活動。新聞に拒絶的な生徒と歩んできたこの 2 年間。生徒の成長と本校での実践を少しでも伝える事ができれば幸いです。

2) 生徒の実態《参照：本校 棚田美穂教諭の報告》

4 月、最初の授業《情報科》で、本校の 1 年生全員を対象に「情報メディアに関する調査」をおこなった。結果は次のとおりである。

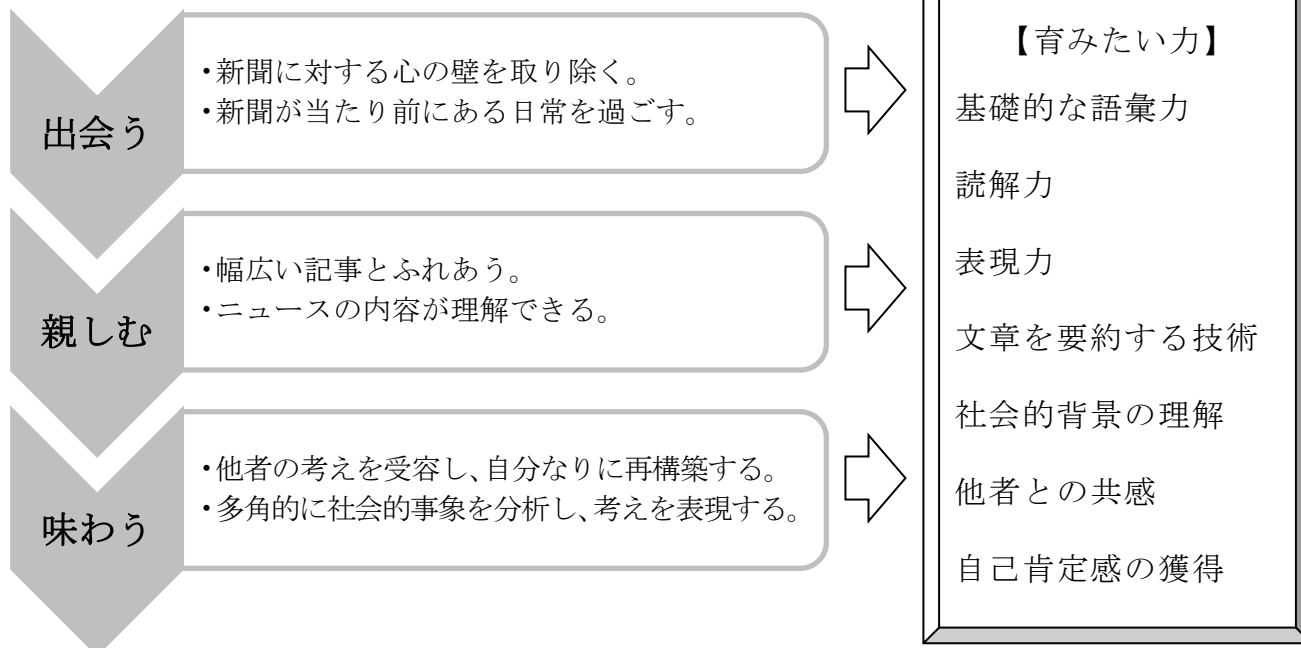


「スマートフォン」や、「テレビ」に比べて「新聞」を見る時間は「ほとんどない」と答えた生徒が多く、情報メディアの利用に著しい偏りがあることがわかった。また「新聞」を読むと答えた子でも、TVの番組表やスポーツ面に偏り、社会面・政治経済面・総合面などを見る生徒は極端に少ない。「読むのが面倒」、「理解ができない」、「新聞でなくても情報は手に入る」といった理由を挙げる生徒がもっぱらであった。

これからの情報社会に必要なことは、新聞やテレビなどのメディアで報じられた情報を様々な視点で客観的に分析・評価することや情報の真偽を正しく判断する能力、また文字や画像を様々なメディアを活用して効果的な形態で表現する能力、つまり「メディア・リテラシー」を身につけることである。しかし、実際には生徒の情報メディアは偏りがあり、この「メディア・リテラシー」が身につけているとは言い難い状況である。このように、情報メディアが偏っている生徒に情報の真偽について考えさせたい。

2 N I E 実践について

1) N I E 活動の方針



2) 「知恵の杜」での実践

「知恵の杜（ちえのもり）」は生徒の往来の多い中央廊下に開かれた新聞閲覧スペースです。購読中の新聞紙を置き、生徒達と新聞との出会いの場になっています。また壁には記事ポスターを貼っています。ポスターは新聞の読み方をはじめ、「平和」、「東日本大震災」、「リニア」などの記事については特集を組み紹介していきましました。また「知恵の杜通信」として、全校生徒に記事や新聞広告《2013年度新聞広告クリエイティブコンテスト最優秀賞作品》を配布しました。ここでは生徒の興味関心を喚起するような記事を選ぶ事で、心の壁を取り除くことを目的としています。



【難しそう・分かなさそう。】
新聞に対する拒絶感

【こんな記事があるんだ。】
様々な新聞記事との出会い

【この記事気になる！】
興味関心のある記事を探す

学校による新聞記事との出会いの提供が不可欠

3) 授業での実践

人文社会研究（3年生学校設定科目：総合的に社会事象を探究する科目として設置）

3年生の学校設定科目である本授業《3単位》における菅沼節子講師の実践を次に紹介します。

① 信毎記者派遣による講義

「新聞について知ろう」「新聞の制作・紙面・文章の特徴」「新聞の作り方・新聞発行の目的」をテーマに計4回の講義をしていただきました。次にあるのは生徒の感想です。

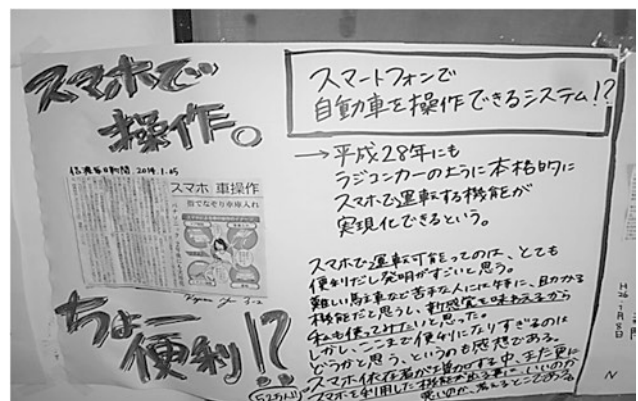
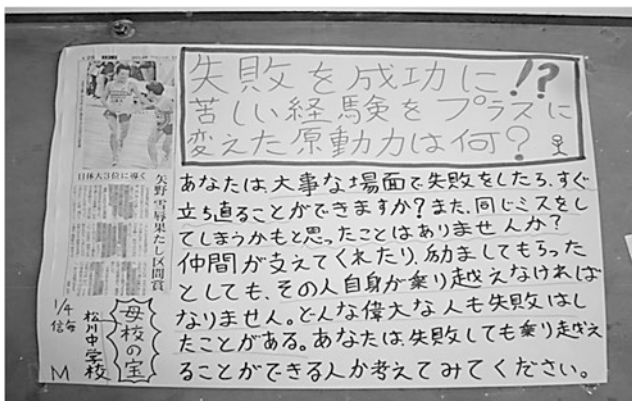
- イ 普段先生にメモを取れ、質問をしなさいと言われるけど、今やるのが大切。将来社会に出て必要だから、今から実践していきたい。
- ロ 講義を受けてみて、新聞には様々な工夫がされていることが分かって良かった。これから新聞を見る目が変わるかも知れない。
- ハ 新聞の文章に以前から読みやすさを感じていたが、様々な工夫がなされていることがわかった。私も新聞記事を手本に文章を書きたいと思う。
- ニ テレビのざっとした情報では分からない細かな情報や、それぞれの記者からの思い（自分とは違う意見もあった場合、また違う価値観を取り入れることができる。）を読めるようになった、その時はきっと新聞の大切さや良さが分かるんじゃないかと思う。
- ホ 今までの講義の中で新聞が作られる過程や5W1Hなど、新聞作成の苦労さを学んだ。これから新聞を読むにあたって、少しでも新聞の知識を覚えた上で読むことができればいいなと思った。

② 記事の読み込み

相当量の記事の要約や感想を書き、それを他者と共有しました。そのなかでイメージマップを作成し、それをKJ法で分類する活動なども行いました。多様な価値観に触れることと、自分の意見が人に認められる喜びを生徒は感じていました。

③ 記事ポスターの作成

「知恵の杜」に掲示していた記事ポスターは主に教員が作成していました。それを生徒の観点で作成したものが次の写真です。



初めは記事の感想を書くにとどまってしまう、読者を意識したメッセージを書けませんでした。「見る人が立ち止まるように工夫し、心に響くメッセージを発信しよう。」と指導すると、生徒がそれぞれの観点で、記事のどこを読者に伝えたいか考えて、ポスターを作成していました。

4) スクラップブックの取り組み

信濃毎日新聞社から提供していただいた無料のスクラップブックを全校に配布し、課題として1年間取り組みました。1年生の時には新聞を開く手が重かった生徒の中にも、2年目となると愚痴をこぼさずに取り組む生徒がいました。今年度の3年生はスクラップブック1冊の完成を目標に取り組みました。3年生は進路を決定する過程で、自身の進路に関わる記事を選び、積極的に新聞を活用しようとする姿が見られました。中には信毎データベースを使い、自ら求める記事を探す生徒もいました。本年度は特に進学志望の生徒にこの傾向を感じました。**就業感を養う、進路についての理解を深める**といった点からも、NIEがキャリア教育と深い関係にあることに気づきました。1、2年次に新聞《社会の情勢》とふれ合う姿勢を育むことが、3年生での進路決定に重要な役割を持つということが分かりました。

次に2年間新聞スクラップを取り組んできた本校二年生の感想を載せます。

- イ 読むようにはならなかったけど、前まではめんどくさかったけど、めんどくさいって言うのは無くなった。
- ロ おもしろい記事や意外なことが書かれている記事があっっておもしろいのだが、自ら進んで読もうとは思わなかった。
- ハ 読めない漢字がほんの少し減った。
- ニ めんどくさかったけど、切り取った新聞については読んで理解することが出来たので良かった。
- ホ 読む時間がなく、読むようにはならなかったが、課題でやった分は読むようになった。
- ヘ スクラップをやり終えて、なんか達成感があった。読み返してみると色んな事があったなと思いました。
- ト 時間がある時は新聞を読むようにしているので、新聞を読む習慣はつきました。
- チ 初めの所は感想も少なかったし、関心・興味も余り示さなかったけど、新聞の課題を始めてからは少しはテレビ欄以外の所を読むようになったかな。
- リ 大変だなあと思うけど、文章力が付くし、その記事でも色んな目線で見ることができて良かったと思う。
- ヌ スクラップは作業になってしまった。
- ル 新聞を読まなくともツイッターなどでも知ることが出来る。
- ヲ 初めは短い記事を選んでいたけど、長くて難しいのを選ぶようにした。長い方が読みがいがあるし、他の人にも知ってもらいたいこともある。
- ワ その一つの記事に対して、友達と話し合ったり、自分自身の中で、一つの意見が持てるようになった。親と話し合うようになって楽しい。
- カ 自分の視野のせまさに気づきました。ニュースで見てもどこか人事のようにおもっていました。自分で読むことの出来る新聞は、自分で考えることにもつながってとてもいいと思いました。
- ヨ あまり興味がない政治などのジャンルについて考えを持つことができた。文章の構成をより理解できるようになった。

3 研究の概要

1) 研究授業

対象：1 学年「情報と社会」2 単位

単元：情報社会における問題の理解および解決と情報発信

新聞の活用方法：新聞で学ぶ

高校生にとって友達同士のコミュニケーションツールとして、今やスマートフォンは欠かせないものとなっている。スマートフォンからインターネットに接続し、LINE（ライン）や Twitter（ツイッター）Facebook（フェイスブック）といった SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）を利用して、仲間同士でコミュニケーションをとるケースも多い。しかし、SNS は相手と画面上だけでやり取りするため、トラブルになるケースも多い。実際に本校の 1 年生においても 4 月から 7 月までは、例年以上に SNS によるトラブルが急増し、教室に入れなくなってしまった生徒もいた。このような状況から本校の情報科では、「情報モラル」に重点を置いた指導をおこなってきた。この授業を受けていく中で、スマートフォンやインターネットの光と影の部分を理解し始めた生徒にスマートフォン所有の功罪について考えさせたい。

情報社会において私たちが受け取る情報量は、飛躍的に増えている。さらにインターネットが普及し、誰もが情報を発信することができるようになった。そのため、情報の発信者は有益な情報を効率的に伝える能力を求められるようになってきた。そのためには、生徒が主体的に考え、討議し、発表し合うなどの活動は大変重要である。しかし実際にはこのような形式の授業はあまり多くないため、生徒は人前で発表する機会が少なく、そういった活動自体を敬遠する生徒も多い。このように自分の意見を人前でプレゼンテーションすることが苦手な生徒にグループごと考えさせ発表させたい。

【新聞利用の際に工夫したこと】

①主張を決め、新聞記事を選定する

スマートフォンや SNS について書かれたいくつかの新聞記事を読み、名簿順に「高校生のスマートフォン使用に反対」（名簿番号前半講座）と「高校生のスマートフォン使用に賛成」（名簿番号後半講座）に分かれて、プレゼンテーションを作成することを通じて、客観的な立場から、スマートフォンや SNS には様々な問題点があること、また便利な点や良い点があることを理解し学ぶことができた。

②情報の収集を新聞に限定

生徒の情報メディアは偏りがあり、この「メディアリテラシー」が身につけているとは言い難い状況である。このように、情報メディアが偏っている生徒に情報の真偽について考えさせるため、あえてインターネットの接続ができないように機器を設定し、情報の収集を新聞に限定した。このことにより、より深く記事を読み込むことができた。

③画像データなどの利用データを、あらかじめ使いやすく収集・加工

情報発信する際には、画像は重要なので、あらかじめ画像のみを切り取ったり、加工したりして、生徒が工夫できるように事前準備をおこなった。

④著作権の問題を意識して発表、発信

参考文献の表示など使った記事の出典先を表示するように常に指導をおこない、そのことによって、生徒は著作権の問題を理解することができた。

2) 本時授業案

	学習活動	教師の支援	指導上留意点
導入	◆プレゼンテーションの概要説明 ◆聞き方・発表の仕方を確認	評価方法について説明 聞く姿勢や発表方法を再確認	発表者は新聞記事の内容を正しく読み取り、聞き手にわかりやすいプレゼンテーションにできるように指導し、また聞き手の生徒はそれにふさわしい態度で臨めるよう工夫する。
展開	◆スマートフォン賛成側の発表。 多種多様なアプリケーションなど、スマートフォンの利便性について触れる。 ◆スマートフォン反対側の発表。 スマートフォンの長時間使用が学力低下やネット依存を引き起こすことを学ぶ。 ◆評価を行う	発表毎に生徒に評価をさせ、良かった点、改善点を書かせ、発表させる。	各グループの発表後の教師の評価については、生徒の評価に影響が出ない程度の内容にとどめておき、できるだけ生徒自身が考えられるように注意する。
まとめ	◆本時を振り返り、スマートフォンとの付き合い方について考え、感想を記入	学習内容を自分の生活に活かせるように助言を行う。	各グループの発表をよく聞き、情報社会の問題点を自分の生活とつなげて考えられるように机間巡視をし、助言する。

4 研究のまとめ

本校の研究の中心となった「知恵の杜」。この活動には大きく二つの性格がありました。

1) 「知識」を育てる場

新聞と親しむことで、社会の扉を開き広い世界を知って欲しいと考えました。現代社会は様々な情報が錯綜しています。飽和した情報の中では、事柄の核の部分はかなり霞がかっている状況が多いです。社会の大きな流れにただ飲み込まれ、恣意的な情報に誘導されてしまう社会人になってしまうのではなく、今まで得た知識を元に情報の真偽を見極め、自分の信じる道を切り拓ける人になって欲しいという願いです。

2) 「心」を育てる場

世の中にあふれる苦悩・不幸・差別・貧困…様々な問題。それを学び、それにどう向き合って生きていくか。生徒は記事を通して辛い状況の中でも前向きに生きよう、強く生きようとする人々の言葉に触れ、生徒は言葉の持つ力を学びます。言葉の持つ優しさと恐ろしさを知り、自身が言葉の発信源となった時、どのような言葉を使うか考えていけるようになって欲しい。自分本位の発信ではなく、他者の気持ちや苦悩を共に分かち合える思いやりのある人になって欲しいという願いです。

知識と心を育て、生きていく上での「知恵」を見つけ出す神聖な場所。これこそが「知恵の杜」に託した願いです。知恵の杜の活動は、大勢の先生のご賛同をいただき、研究授業担当以外の教科でも多くの新聞活用が実現しました。「家庭総合」《児童虐待に関する記事》、「社会と情報」《斜面を使つてのタイピング練習》、「学年通信」《進路に係る記事を掲載》などです。

研究指定校が終わる3年目でも継続性をもってN I Eに取り組めるかが、全国大会等でも課題としてあげられていました。しかし、販売店の皆様のご協力を得て、来年度も十分な新聞活用を続けることが出来ます。また本校の多くの教科が積極的に新聞活用の方法を考えてくれる体制にも心強さを感じます。セミナー・研究会・学校内で多くの先生・新聞社の皆様に悩みを聞いてもらい、一人で抱え込むことなく活動ができました。多くの皆様に助けて頂いたおかげで、この2年間があります。N I Eを通して、多くの記事と出会い、多くの先生と出会い、多くの実践と出会えたことで、何よりも自分自身が一番成長できたと思います。松川高校が得た財産をこれから先、多くの生徒のために活用していきたいです。

5 残された課題

1) “ファミリーフォーカス”

昨年度から引き続いての課題です。年度当初に「記事の選定や内容について家族と話し合うのもいいですね。」と発言して、スクラップブックを配布しました。昨年には見られなかったスクラップブックの記事の選定・内容について家族と相談する生徒が見られました。こうして、新聞記事を通して生徒が自分の意見を先生だけでなく、多くの人に見てもらえる。その中で自分を肯定できるようになって欲しいと考えています。

2) “他人事にならない”

スクラップブックをやる中で多く見られた傾向で、どうしても感想が他人事になってしまうことです。「～がんばって欲しい」、「～かわいそうだと思う」といった感想が多く見られました。そのため「ただ他人事になるのではなく、自分ならどう考え、どう動くか」といった声かけを行いました。ただし、主体性を強制することは主体性を奪うことになりかねないので、何らかの仕掛けを作り、生徒が主体的に考えることができる活動を仕組むことが必要になってくると思いました。他者に寄り添い、気持ちを分かち合える人こそ、他者に愛され、幸せをつかむことができると思います。だからこそ、日々の生活や新聞記事を通して、「豊かな感受性（心）」を育てて行けたらと考えています。

3) “多種多様なメディアの中での「新聞」”

本校の生徒のみならず、多くの高校生にはメディア利用の偏りが見られると思います。学校生活の中で新聞を使うだけで、卒業後に新聞とは縁をきってしまう生徒もいるのが現状です。高校生は多種多様なメディアの中で、新聞を切り捨て、スマートフォンやTVに依存して、情報を入手することが多いのが実態です。生徒にとって新聞を見ないことは罪な事ではなく、メディアの偏りこそが危惧すべき事だと考えます。今ではなく、5年後、10年後を意識し、学校にいる間だけでなく、人生の伴侶として多様なメディアと付き合っていけるように、生徒の未来を見据えた新聞活用を行っていきたいと思います。